

「伝妙源院所持『伊勢物語』」は、既に本誌で紹介した『あきぎり』『源氏大鏡』などと同じく、村上可卿が収集した伊保庄村上文庫の物語関係の一冊である。<sup>注1</sup>入手経路等は不明だが、小松茂美が本書を見たことを記す可卿の貼紙があることから、一九七三年以前に所蔵されたと思われる。<sup>注2</sup>本書の概略を記す。

形態 四半本（縦二四・七cm×横一七・五cm）

巻数 一卷

書写 室町末期。書写した人物は未詳。

外題 なし

内題 なし

表紙 原装。ウラ表紙オモテ表紙共に、紺地金泥草花図。

見返し オモテ表紙には料紙第一紙目が、ウラ表紙には最終紙が、それぞれ見返しとして表紙に糊付けされている。

料紙 斐紙

装幀 列帖装

綴じ穴 四箇所。綴じ紐は朱。

丁数 三十五紙。六十八丁。全五括り（一、六紙。二、七紙。三、十紙。四、七紙。五、五紙）

墨付 六十七丁。巻末に遊紙一丁。

本文 一面十行。一行二十字前後。和歌は行替えし、上下句を二行に分ち、全体を二／三字下げる。末尾も行替えする。

本書には本文と同筆の武田本の奥書がある。しかし冒頭部が欠落しており、また一部に挿入が認められる。

（一）内は欠落・網掛けは挿入

〔台多本所用捨也可備證本〕

近代以狩使之事為端〔之〕本出来末代之

人今案也更不可用之

此物語古人之説不同或稱在中将〔之〕自

書或稱伊勢〔之〕筆作〔就〕彼此有〔書〕落事

等上古之人強不可尋其作者只可

翫詞花言葉而已

戸部尚書在判

『伊勢物語版本集成』<sup>注3</sup>に閲すと、同じように武田本奥書の冒頭部を欠く

版本は多いようであり、山本登朗に「一部の武田本の写本にもこの形でよくもちいられている」という指摘がある。<sup>注4</sup>

勘物・集付・異文・傍注等の注記類はまったくなく、蔵書印などもない。

また補入・ミセケチ等、本文に書き入れた訂正もない。誤記は丁寧に削り消しており、胡粉を塗って書き直した箇所もある。たとえば17ウ⑩「ま

ちわひ」、65オ①「君」の訂正は胡粉が施されてわかりやすいが、10オ③「お

とこ京へなん」、④「くりはらの」あたりは、映像ではわかりにくいほど

丁寧な削り消されている。こうした訂正箇所は少なくないが、一面十行に

乱れはなく、繊細な気遣いをしながら書写したことがうかがえる。

本書は、あつらえのかぶせ蓋の杉箱（縦二七・四cm×横二〇・〇cm・厚さ二・

六cm）に入る（写真1）。かすかだが、蓋の表側右上に「四」とも読めそう

な打ち付け書きがあり、貼紙の跡らしいものがある。また箱中央部にほと

んど擦り剥がれて判読できない貼紙がある。その左にはほぼ同じ大きさの

貼紙があった痕跡がある。もっとも左側には「（い）せ物かたり一冊」と

記された題箋があり、その左には小さな数文字が見えるが判読できない。



写真2



写真3



写真1

蓋の下部側板には別筆で「妙源院様／遺物／伊勢物語」という貼紙がある（写真2）。蓋内側には貼紙等はなく、右側板の一部が欠損している。

身の内側に二枚の貼り紙がある（写真3）。右上部の一枚は可卿の筆で、小松茂美博士意見／伝妙源院御遺物／伊勢物語／室町末期書写とある。左下部の貼紙は、蓋の貼紙とは別筆で、

伊勢物語巻冊／妙源院様御遺物也／酉年十一月四日

と読める。この「酉年」が何時のことか特定できないが、紙は古い。本書の素性を示すもっとも古い資料であろう。貼り付け時期は不明であるが、二枚の位置関係から可卿がこの位置に貼った可能性も否定できないであろう。ほかに中央上部に紙を剥がした跡がわずかに残る。なお、貼紙はそれぞれ別筆であり、本文とも異なるようである。

## 二

山田清市に武田本の代表的な一本である伝東常縁筆本と伝藤原定家筆天福本との異同を示した校異表がある。<sup>注5</sup> 伝妙源院所持本の本文をその校異表と比較すると、武田本の特質箇所として挙げられた四十五箇所の内、二十五箇所は伝常縁筆本と一致するが、十九箇所は天福本の本文と一致した。<sup>注6</sup> また次に示すように本書独自の異文も多く、武田本とは距離があるようである。

伝妙源院所持本文を他の定家本と校合した結果、誤写・衍字・欠字を含む独自の本文及び諸本にあまり見られない本文を、総てではないが「伝妙源院所持本に特徴的な本文」（表1）として取り出してみた。校合のテキストには、武田本は伝常縁筆本・伝後柏原院宸筆静嘉堂文庫本の二本、天福本は学習院大学図書館蔵伝定家筆本、根源本は第一系統の九州大学本を用いた。<sup>注7</sup> 抽出した二十五箇所について、表記の違いは別にして三系統四本の本文には一例を除いて対立はなかった。異同があった一例、一〇七段は、本書では削り消しの後、記入を遺忘した一文字が欠字になっている（61才<sup>注8</sup>）。



この表では、欠字（一〇七段）と衍字（二〇九段）の二箇所を除いた異文は二十三箇所にある。そのうち十五箇所は脱落によって生じている。また二十五箇所のうち十一箇所は全くの独自異文だが、ここに挙げた以外にも広本などを含めて異文としての同文がごく少数である例が多い。<sup>注9</sup>二〇段の「返事」が「返し」となっている異文も、九六段の「いにし所」が「いにしへ所」とある誤写部分も完全に孤立した本文ではない。特に一〇七段「おとこいたうめて、」と「ふみはこに入て」は塗籠本九七段にのみ見える異文である。<sup>注10</sup>

このように見てくると伝妙源院所持本は、武田本の奥書を持つてはいるが複数の系統と接触した可能性がある本文と言えよう。しかし、本書の書写に対する姿勢は至極丁寧であり、二三段末尾の欠落、九六段の「いにしへ所」、一〇九段の衍字「あたにに」という本文の過誤も総て親本を忠実に写した結果ではないかという印象を持つ。一〇七段の遺忘に因る欠字が唯一の疵であろう。

### 三

さて本書の伝来を示す「妙源院」は、調査した限りでは『系図纂要』<sup>注11</sup>に載る梶原景時の九男、景連以外には逢着しなかった。しかしながら景連の没年は正治二（一一〇〇）年であり、建保六（一二二八）年から嘉禄三（一二二七）年の間と考えられている武田本の成立時期と前後してしまう。<sup>注12</sup>このことから、室町末期書写との指摘と相俟って、武田本の奥書を持つ本書をただちに景連の「遺物」とするのは難しいようである。

従って「妙源院」は未知の別人物の可能性はあるのだが、本書伝来の伝承として梶原景連について見ておきたい。

『系図纂要』に拠ると景連は、長兄景季・次兄景高の弟として「九郎同父兄討死 妙源院」とあり、景時の変に父兄と共に戦死したことが記されている。景時の変は『吾妻鏡』などに詳しいが、正治二年一月二十日に駿河の国清見関あたりにおいて一族の大半が討ち死にして収束する。景連については『吾妻鏡』一月二十・二十三日の二条に討ち取られたことが見えるが、その人となりを示すような事蹟の記述はない。<sup>注13</sup>

『吾妻鏡』には、景時が和歌を好み、頼朝と連歌を交わし、住吉大社代参の折に歌を詠んだ逸話や、<sup>注14</sup>景季や景高の歌に関する逸話が記されている。<sup>注15</sup>室町期成立と考えられる『武家百人一首（A本）』に景季・景高が選ばれているのははじめとして同類の百人一首に梶原の人々の歌を見ることができ。<sup>注16</sup>大谷雅子には『吾妻鏡』にみる限り関東武士のなかで和歌を詠じたのは梶原父子だけである。<sup>注17</sup>という指摘もあり、梶原一族が和歌を重んじていたことに疑う余地はない。従って、和歌を学んだであろう景連が『伊勢物語』を所有したと考えることは無理のない推測である。

景時の戒名「龍泉院殿梶勝源公大居士」は没後百六十年の延文五（一三六〇）年に景時九代の裔、景慶が、矢崎山に梶原山龍泉院（曹洞宗）を建て、一族を祀ったときの諡ということである。<sup>注18</sup>同じ時の諡なのであろう、『系図纂要』が記す景時の変に没した七名の兄弟の戒名には、景季「光源院」、景高「徳源院」など、みな「源」が用いられている。妙源院景連の享年は不明だが、『系図纂要』が示す兄たちの年齢からおそらく二十歳代であったと思われる。<sup>注19</sup>

妙源院を景連だと仮定して考えると「妙源院様御遺物也」という貼紙は、延文五年以後に記されたことになる。さらに広く知られていない景連の戒名を知り、敬語を用いていることを考慮すると、貼紙を記した人物には、菩提寺にあたる龍泉院の関係者か、梶原の後裔が想定できそうである。妙源院所持という伝承は、本書の祖本が和歌に親しんだ梶原一族とどこかで関わったことを物語っているのかも知れない。

最後になったが、伊保庄村上文庫『伝妙源院所持『伊勢物語』の影印発表をお許しいただいた村上房子氏に感謝を申し上げます。また撮影と資料整理には本学図書館及び吉岡薫子・松岡陽子両氏の御協力を得た。

### 注

1 「学苑」二〇一四年十一月号・二〇一六年十一月号。

2 注1参照。

3 山本登朗編集『伊勢物語版本集成』竹林舎。二〇一一年十月。



